

子どもたちの運動・スポーツ環境の現状と意識

—子どもたちへのアンケート調査をもとに—

生涯スポーツゼミナール 1213188 渡邊早絵

1. 研究の背景

現代の日本において、社会の変化に伴い子どもを取り巻く環境が大きく変化しており、その結果子どもの体力が低下している。中央教育審議会（2002）は、子どもの体力低下の原因として、以下のように述べている。

- ① 保護者をはじめとした国民の意識の中で、子どもの外遊びやスポーツの重要性を軽視するなどにより、子どもに積極的に体を動かすことをさせなくなった。
- ② 子どもを取り巻く環境については、生活が便利になるなど子どもの生活全体が、日常的に体を動かすことが減少する方向に変化した。
- ③ スポーツや外遊びに不可欠な要素である時間、空間、仲間が減少した。
- ④ 発達段階に応じた指導ができる指導者が少ない。
- ⑤ 学校の教員については、教員の経験不足や専任教員が少ないなどにより、楽しく運動できるような指導の工夫が不十分との指摘がある。
- ⑥ 運動実践については、運動する子どもと運動をしない子どもの二極化の傾向にある。

このように様々な要因が複雑に絡み合い、子どもの体力低下を引き起こしている。④と⑤については過去の環境から悪化してしまったものではなく、継続的な課題であるように考えられる。そのため体力・運動能力が向上しない原因として捉えられる。それに対して②と③については過去の環境から悪化してしまったものであり、この2つが体力・運動能力を低下させた原因になっているのではないかと考える。

体力・運動能力の低下について調べていくと、体力・運動能力の向上のためには子どもを取り巻く環境を見直し、どのような現状になっているのかを理解するべきであると感じた。そして、現在の社会情勢のなかで子どもたちが運動・スポーツに取り組める環境を整備するには何が望まれているのかを考えるべきだと感じた。

2. 研究の目的と必要性

保護者などの大人や社会情勢といった外的要因により変化した環境に対して子どもたちはどのように考えているのだろうか。着目点としては過去の環境と現在の環境を比較することのできない子どもたちにとって現在の環境はどのように感じているのだろうか。子どもの視点から現在の環境の実情を示していきたい。また、子どもたちの環境に対してどのような意識を抱いているかを明らかにしたい。また、そこからどのような環境整備をしていくことが望まれているのかを考察し、今後の子どもの運動・スポーツを行う環境について考える上での指標にしたいと考える。

世間では平均身長が高くなることや、栄養状態が良くなるなど、子どもの体格が昔に比べて良くなったという話を耳にする。しかしそれと同時に子どもの体力・運動能力は悪くなっているという話も耳にする。体格が良くなっているにもかかわらず、体力・運動能力が悪くなるというのは矛盾しており、違和感を感じる。例えば日本の陸上選手は他国の選手と比べて体格が劣っており、短距離で勝つのは難しいと考えられてはいないだろうか。このように体格の良いほど体力・運動能力が高くなりやすいとする

ならば、なぜ体格が良くなった現在の日本の子どもは過去と比較して体力・運動能力が高くないのであろうか。さらに日本の子どもは過去の子どものと比較して体力・運動能力に変化がないのではなく、低下していると言われているので矛盾していると強く感じてしまうのだろう。そして何か体力・運動能力を低下させる大きな原因があるのだろうと推測される。

3. 研究方法

- ・平成28年11月12日午後と11月13日全日に実施
- ・千葉市子ども交流館に来館した小学生に対して声をかけ、アンケートの協力を依頼し、許可を得られた人に対してアンケートを配布して適宜実施した。回答をしてもらったアンケートはその場で回収した。
- ・アンケート内の表現理解が難しい場合、直接理解できるように内容を伝えた。

4. 主な結果と考察

- ・子どもたちの多くが習い事をしており、今よりもスポーツや運動実施の時間を長くしたいと考えている。
- ・子どもたちの運動遊びやスポーツをする場所への移動手段は自転車が多く、15分以内の移動時間が多い。
- ・子どもたちの多くは遊び場所を公園としている。住宅やその周りではなく、施設を利用している子どももいるが、多いとは言えない。
- ・雨の日に使えぬ施設が少ないと思っている子どもが多く、遊び場でボールを使えない事が嫌だと思う子どもは思わない子どもとの2極化がみられるが、過半数存在する。
- ・習い事をしている子どもが多いなか、学校が終わってから3人以上の友だちと過ごす子どもが多い。
- ・家族がスポーツ練習や運動実施を手伝ってくれると考えている子どもが多い。

整備において大切だと思われるポイントをまとめると以下5つになる。①子どもの生活する2km範囲を整備する。②雨の日でも使える屋内施設を整備する。③ボールを使えぬ施設を整備する。④共に活動する仲間を増やせるように整備する。⑤親が子どもの活動を観られるように整備する。

5. 調査における今後の課題

子どもたちの意識を調査するという事は容易なものではなかった。例えば、「あなたの親はスポーツ活動を手伝ってくれますか」というアンケートを実施している際に、親が「いつも手伝ってあげていないじゃない」と一言子どもに言ってしまうと子どもは手伝ってくれるという項目に丸をつけざるを得なくなってしまう。大げさに言うと意識操作が行われてしまうと感じた。

調査結果の質を下げないようにするために、子どもたちに伝わる言葉で尋ねなければならないことや親の干渉を受けないような形でアンケートを実施しなければならないことなど工夫が求められた。

6. 卒業論文の執筆を終えて

今回の研究の調査協力をしていただいた千葉市子ども交流館の皆様、ならびにそこを来館した多くの子どもたちに感謝したい。さらに、研究の指導をしていただいた順天堂大学生涯スポーツゼミナールの黒須充先生にも感謝したい。将来を生きて行く子どもたちの生活が有意義になること、その中でも子どもたちの運動・スポーツの活動環境がより良くなることを祈っている。今後も何かしらの形で子どもたちのために活動したいと考える。